

# 吉田東里

よしだ・とうり

日本画家

## 経歴

生:文化10年(1813年)7月16日、福山生まれ

没:明治24年(1891年)1月3日没、享年79歳、福山吉津町高光山長正寺に葬る

天保9年(1838年)閏4月9日	24歳	福山藩吉田信光の嗣となる
—	—	元締役から進んで用人上席となる
慶応2年(1866年)8月	53歳	城番および用人
—	—	京へ赴き岡本豊彦に師事
—	—	田中日華に師事
—	—	国事にも干渉
—	—	父莊太郎が没したのを機に故郷へ戻る
—	—	文武二道を志向
—	—	余暇として画道を楽しむ
—	—	『東道余暇』を描く
明治3年(1870年)	57歳	致仕
明治8年(1875年)1月22日～10年(1877年)2月27日	62～64歳	国会会計取締役を命ぜられ阿部家の財務処理

## 生い立ちと学業、業績

幼名は豊蔵、諱は鄰憲(ちかのり)、吉田信光の嗣となり助太を名乗り、のち彌五左衛門豊省(とよあきら)と称した。晩年には喜園・如睡・濤湖などと号した。

代々阿部侯に仕え、正弘・正教・正方・正桓の四侯に歴事した。元締役から進んで用人上席となり、慶応2年(1866年)8月には城番と用人を兼務した。

幼時より書画を好み、いつも隣家において群書を借用して読み耽っていた。

長じては画道を選んで大成を目論み、弱冠にして京へ赴き岡本豊彦に師事した。岡本豊彦

は備中生まれ、呉春の高弟であり当時四条派第一の巨擘であった。されども豊彦が老いて教えることができなくなったため、ついで豊彦の門人である田中日華に師事した。日華は九峰堂と称して、画道において一見識を持っていた。関房印に「餘白皆画なり。後人をかすべからず」として、頗る気節があった。殊に山水を得意とした。画風は豊彦そのまま、かつ気品があった。以来日華の門人として奮励困苦を続けた。もとより貧しており、食うにもことかきながらも画道を諦めなかった。技を磨き、蘊奥を極め、ついには妙域に達した。山水がもともと得意であった。

時代は維新の改革へと進み、京師は騒然としていた。菱田日東との交友も深く、いささか国事にも干渉した。

父莊太郎が没したのを機に故郷へ戻り、文武二道を志向したため、画道は余暇として楽しんだ。酒を好み、筆を揮うときは数杯の酒で、筆勢が弾んだという。なかんずく山水は、その気風品格が洛陽の大家のごとく紙面に生動していたという。特に東海道の風景を好み、その名所旧跡のすべてを臨写した。それを「東道余暇」と名付けた。前後あわせて数巻になったという。ついても富士山の写生には大いに苦心をしていた。そもそも富士山の風景は、見るところ、描くところによって趣はそれぞれではあったが、東里の画は、自然に勝る勢いがあった。

東里の門人に藤井松林がいて出藍の筆才があったが、その画の気品の高さはとうてい及ばなかったという。

57歳で致仕し、間もなく廃藩置県となった。

のち、明治8年(1875年)1月22日より明治10年(1877年)2月27日まで藩主のために国元会計取締役を命ぜられ阿部家の財務処理に携わった。数年にして整理が大いに進んだ。

しかし旧君の墓参・冠婚葬祭など、ことあるごとに恩賜されていた。老年になっても気力はますます盛んで衰えを知らなかった。70歳の後までも米麦を舂き、72歳の時に中風症に罹ったが、けっして筆を擱かなかった。日常生活においては死の数年前には柩を用意するなど常に注意周到で、あらゆるできごとを記録に残した。

明治24年(1891年)1月4日逝く。享年79歳。福山吉津町、高光山長正寺に葬る。諡は、東里院豊省日遊居士。

#### 誠之館所蔵品

管理No.	氏名	名称	発行所	発行日
07020	藤井松林ほか 画	日本画「福山藩画人花寄書」	—	—

出典1:『福山学生会雑誌(第51号)』、附13頁、「吉田東里先生小傳」、五弓安二郎著、福山学生会事務所編刊、大正6年5月31日

2013年10月17日追加●2015年2月28日更新:誠之館所蔵品●